

報告

立ち会い分娩をした夫婦の助産師学生の かかわりに対する認識

上野 恵子* 穴田 和子** 浅生 慶子***
加藤 絢子**** 小山 麗**** 前田 知恵美****

＜要 旨＞

本研究の目的は助産師学生が立ち会い分娩を行う夫婦を十分にサポートできる援助方法について検討することである。対象は条件を標準化するために作成した基準リストに適応した産婦および夫で、助産師学生が分娩第1期から受け持ち、立ち会い分娩を行った11組の夫婦である。分娩時の緊張・興奮状態が軽減する産褥2日目以降に褥婦、夫に対し個別に面接を実施し、逐語録をもとに分析した。

夫婦は学生に対して非受容的、教育的、受容的の3つの視点で捉えていた。この3つの視点をもとに学生に対する受け持ち当初と分娩後の心理的变化を整理したところ①夫婦共に受容的 ②夫受容的・妻非受容的 ③妻非受容的 ④夫教育的・妻非受容的 ⑤夫教育的・夫婦非受容的 ⑥夫婦非受容的の6つのカテゴリーに分類された。その結果、1. 夫婦の学生に対する認識は受け持ち時の説明により相違が生じていた。受け持ち時には学生の身分と実習内容を盛り込んだ説明基準を用いて具体的に説明することが必要である。2. 夫は学生に対して教育的視点を持っていた。3. そばに付き添い、夫婦に関わる学生は産婦だけでなく夫に対しても安心感を与えており、それはドゥーラとしての効果であることがわかった。

キーワード：夫立ち会い分娩、助産師学生のかかわり、助産師学生のケア、ドゥーラ効果

I. はじめに

助産学実習において助産師学生（以下学生とする）が産婦を受け持ち、ケアを行う際、立ち会い分娩を希望する夫婦に対し助産師学生にどこまで介入させるか戸惑うことがある。本来、役割は異なっているが、夫と学生が産婦に対して行うケアが一見同様に見えることが多い。学生の介入が立ち会い分娩において夫の役割を奪ってしまうことになってはいないだろうか。産婦だけではなく夫も含めて夫婦のニーズを満たすためにはどうかかわり方が必要であるかを検討した。

近年妊産婦のニーズが多様化し、母児ともに安全な分娩であることはもちろん、産婦と夫、および家族が主体的に取り組み満足できる分娩が求められ、様々なスタイルの分娩が行われるようになってきた。その中の一つとして「夫立ち会い分娩」がある。わが子の誕生の瞬間を妻と分かち合いたいと出産時に立会いを希

望する夫が増えており、多くの施設で実施されている。これは、出産・育児は妻一人の問題ではなく、子供の両親となる自分たち夫婦の問題であるという意識の表れと考えられる。立会い分娩の利点として①産婦の精神的安定が得られる ②父性が向上し、父親役割がスムーズに獲得され、育児参加が多くなる、等が明らかになっている¹⁾。

出口ら²⁾の立ち会い分娩を実施した夫の意識研究において、妻は「夫がずっと付き添ってしてくれた」「励ましてくれた」「二人で協力し頑張っていることが自然だった」と答えており、満足度は87.7%であった。その一方で夫の満足度は55.4%と妻よりも低い結果であった。その理由としては「もっと何かしてあげたかった」「何をして良いか分からなかった」などがあげられていた。立ち会い分娩時の夫婦の感情について夫は妻の痛みの緩和をはかり、そばにいて励ますといった気持ちを持つことが分かっている⁵⁾。夫は妻の精神的

* 西南女学院大学助産別科 講師
** 西南女学院大学助産別科 助手

*** 西南女学院大学助産別科 教授
**** 西南女学院大学助産別科 第1期生

な支え以上に具体的に何か行動できることを望んでいることが考えられる。

立ち会い分娩を望む夫は我が子が産まれてくるプロセスを産婦と共有したいと思っているのではないだろうか。我が子を出産するために陣痛に苦しんでいる産婦が少しでも楽になれるようにとマッサージを行い、手を握って産婦を激励する。また、同様に産婦も夫にマッサージや手を握ってもらうことを望んでいるのではないだろうか。

渋谷ら⁴⁾の研究では分娩終了後の産婦のほとんどは助産師学生の存在を肯定的にとらえ印象も良かった。学生の存在に対する受け入れは分娩終了まで継続的に関わる実習体制の中で肯定的感想が多く、具体的には、産婦は「学生がそばについてくれていたことで不安を感じる事がなかった。」「学生さんのおかげで乗り越えることができた」「手を握りリラックスできるよう声掛けしてもらい、安心できた」など、そばに付き添うことで安心するといったドゥーラ効果が得られるということが分かっている。学生は分娩について学習し、エビデンスに基づいて産婦の産痛の変化や分娩の進行に合わせてケアを行っている。また、専門的な視点から産婦の安全・安楽を目的として産痛緩和のためマッサージや呼吸法の誘導を行い、不安の軽減のためそばに寄り添う。

“産婦と夫”“産婦と助産師学生”といった二者の関係では各々の影響は先行文献^{1) 2) 3) 4) 5)}により明らかとなっているが、“産婦と夫と助産師学生”の三者の関係における影響については明らかになった文献は見られない(図1参照)。夫と産婦の二者の関係であった場合でも夫の約半数は立ち合いに対して不満足であると述べている。先述したように夫が産婦にしてあげたいと思っている事とケアが一致している学生の存在に対して、夫はよりいっそう不満足と感じるのではないだろうか。また、産婦が満足と感じている夫の役割についても学生が役割を担っている部分があるのではないかと考えられる。

本研究の目的はこれらを明らかにすることで、学生が立ち会い分娩を行う夫婦を十分にサポートできる援助方法を知ることである。

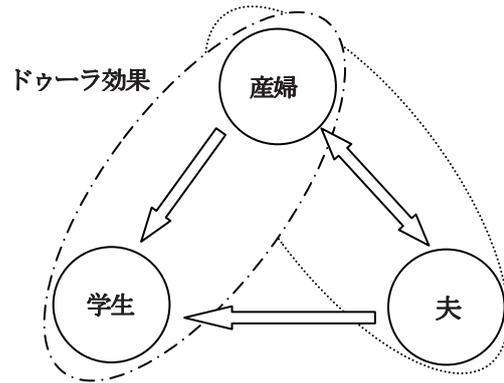


図1. 夫婦と学生3者関係の概念図

II. 用語の定義

- ・夫立ち会い分娩：陣痛開始から産婦のそばに夫が付き添い、出産の場面に夫が立ち会うこと。
- ・助産師学生のかかわり：産婦・夫に対する学生の姿勢・態度。
- ・助産師学生のケア：産痛緩和マッサージ、呼吸法などかかわりの中で行うケア。
- ・ドゥーラ効果：分娩期の産婦に寄り添い、身体的・心理的支援を実施することで精神的に癒される。

III. 研究方法

1. 調査対象

K市内の2つの実習施設において、学生が分娩第I期から受け持つことを承諾し、立ち会い分娩を行った産婦およびその夫11組である。

2. 研究期間

平成20年6月～平成21年3月

3. 調査期間

平成20年10月～12月

4. 調査方法

以下のような基準リストを設け、基準に適応した褥婦および夫を対象に面接を実施する。

[基準リスト]

- 助産師学生が受け持つことの説明を受け、了承している。
- 助産師学生は看護師免許を持ち、出産に関する専門

的学習をしている者であることを理解している。

- 夫婦ともに立会い分娩を希望している。
- 立会い分娩後2日目から退院までに面接が可能である、調査協力・承諾が得られた褥婦および夫とする。

〔面接方法〕

・分娩直後から産褥2日目までは緊張・興奮状態にあるため、産褥2日目から退院までの期間に褥婦および夫に面接を実施する。

褥婦：疲労の確認を行い、産褥1日目に調査の説明、承諾を得る。

夫：面会状況が不明であるため、分娩終了後、調査の説明・承諾を得、事前にアポイントをとっておく。

・質問用紙(参考資料①)にそって、直接分娩に関わっていない学生または教員が面接を実施し、面接内容は逐語録にした。面接時間は夫婦それぞれ15分程度とする。実施場所は他人に干渉されない個室にて夫婦別々に行う。

〔分析方法〕

・面接により得られたデータ(逐語録)を夫婦の質問項目ごとに整理しKJ法により分類し、3つのキーワードを抽出した。さらに学生の受け持ち当初と分娩終了後のキーワードに対する夫婦の認識の変化を6つのカテゴリーに分類した。

5. 倫理的配慮

対象者には研究の目的・プライバシーの保護・回答の自由を説明する。研究に協力をしなくても不利益は生じないこと、いつでも面談を拒否することが可能であることを伝える。個人のプライバシーの保護として人物が特定されないように表記すること、得られたデータは研究目的以外には使用しないこと、及び個室にて行うこと、分娩介助についての学生の評価に影響しないことを口頭で説明し、理解と承諾を得た。

なお、本研究は西南女学院大学の倫理審査委員会の承認を受けている。

IV. 結果

対象者は11組の立ち会い分娩を実施し、終了した夫婦で初産9組、経産2組であった。

面接により得られたデータを分析した結果、夫婦は学生を次の3つの視点で捉えていた。①非受容的：学生に対して何らかの不安因子や戸惑いを言葉にしている。②教育的：学生に対して学習して欲しいと言葉にしている。③受容的：是非受け持つて欲しいと言葉にしている。この視点が受け持ち当初と分娩終了後にどのように変化したかを経時的に整理した結果、受け持ち当初の学生に対する気持ちから、6つのカテゴリーに分類された。(表1参照)

分類Ⅰの「夫婦共に受容的」であったケース⑧⑪は受け持ち当初から終了まで、一貫して学生が担当することを積極的に受容していた。ケース⑪は経産であった。

分類Ⅱの「夫受容的・妻非受容的」なケース⑩は夫婦とも学生の受け持ちを了承はしたが、妻は当初不安を持っていた。

分類Ⅲの「妻非受容的」なケース⑤は妻が当初不安を持っていたが、夫は気持ちを特に述べなかった。

分類Ⅳの「夫教育的・妻非受容的」なケース③④⑥については、夫は学生が受け持つことを了承したときから助産師を育てる、勉強しているといった教育的視点で受容していた。一方、妻は当初不安な気持ちを述べていた。

分類Ⅴの「夫教育的・夫婦非受容的」なケース②⑦⑨は夫婦とも不安はあるが、夫は当初から学生の実習に協力したいという教育的視点を持っていた。なおケース⑨は経産であった。

分類Ⅵの「夫婦非受容的」なケース①は学生の受け持ちを了承はしたが、夫婦とも当初は不安を感じていた。しかし、11ケースの夫婦とも分娩終了後には「安心した」「いてくれてよかった」など受容した言葉を述べていた。

表1 夫婦の学生に対する認識の変化

| 分類 | ケース | 受け持ち当初の学生に対する気持ち | | 分娩終了後の学生に対する気持ち | |
|----------------------|------------|---|---|--|--|
| | | 夫 | 妻 | 夫 | 妻 |
| Ⅰ 夫婦ともに受容的 | ケース⑧ 初産 | ・学生だけじゃないからいいんじゃないかと思った。 | ・学生だから色々気を遣ってもらえそうで、ぜひ付き添ってほしいと思った。 | ・イメージしていたより正規の助産師と変わらない。出産後も関わってくれることが安心。 | ・もっと学生っぽいと思っていたが全然違った。助産師さんみたいな感じ。 |
| | ケース⑪ 経産 | ・看護師免許を持っているので問題ない。 | ・夫が同じ立場なのでぜひと思った。(夫看護学生) | ・変化なし | ・変化なし |
| Ⅱ 妻非受容的・ 妻非受容的 | ケース⑩ 初産 | ・学生ということかえって一生懸命してくれるかなと思った。 | ・足手まといかな。こういう風に関わるのか不安だった。 | ・しっかりしていると思った。 | ・助産師が2人ついてくれている感じだった。ついてくれて本当に良かった。 |
| Ⅲ 妻非受容的 | ケース⑤ 初産 | ・別に何も思わなかった。 | ・驚きはあったが不安はない。「えっ？」と思った。 | ・ずっといてくれたから安心できた。 | ・ずっと傍にいてくれてよかった。 |
| Ⅳ 夫教育的・妻非受容的 | ケース③ 経産 | ・勉強をするために来ている。ベテランでも日々勉強だから特に抵抗はなかった。 | ・助産師学生だけがつくと思って不安だった。 | ・しっかりしていてベテランと変わらない。 | ・ついてもらってよかった。 ・気にかけてくれることが嬉しい。 ・産後も不安なことや聞きづらいことも学生には聞くことが出来た。 |
| | ケース④ 初産 | ・助産師を育てるために学生を受け入れることが必要かと思っただけ。 | ・学生で大丈夫かな？と思った。 | ・ベテランと一緒にだから問題ない。 | ・あの学生に取り上げてもらったと感じることが出来る。 ・自信を持ってやっていたので任せることが出来た。 |
| | ケース⑥ 初産 | ・病院に学生がいることは知っていた。こういうことをしているのかも知っていた。協力出来ればと思った。 | ・学生が受け持つということの意味がよくわかっていなかった。ただ見ているだけだと思っていた。 | ・思った以上によくやってくれた。 | ・知識が豊富で助産師と変わらない。・信頼している。 |
| Ⅴ 夫教育的・夫婦非受容的 | ケース② 初産 | ・学生ということが不安だったが勉強してほしいと思った。 | ・少し不安に思った。 | ・親しみやすく安心した。 | ・一緒にいてもらったことが安心できた。いてもらってよかった。 |
| | ケース⑦ 初産 | ・不安と同時に貢献してあげたいと思った。 | ・すごく不安だった。 | ・安心していた。 | ・よくしてくれた。プロの人とは違うが親身になってくれたことがよかった。ついてくれて安心した。 |
| | ケース⑨ 経産 | ・学生だったらちょっと不安だったが、上の人に言ってくれば大丈夫と思った。 ・協力しようと思った。 | ・見ているだけなのか、どこまで一緒にするのかと思った。 | ・自然にやさしく接してくれたことが安心した。 | ・苦しいときに声をかけてもらって励みになった。よくしてくれた。温かい感じがした。 |
| Ⅵ 夫婦非受容的 | ケース① 初産 | ・学生で大丈夫かと不安に思っていた。一緒に立ち会うとしか思っていなかった。 | ・内診されたら痛いかなと思っていた。 | ・取り出すまでもらって感謝している。一緒に歩いたりしてくれていたのが信用できた。励ましてくれたのでよかった。 | ・今までつきっきりというのはなかった。付き添ってとりあげてくれてよかった。心強く、嬉しかった。 |

V. 考 察

1. 学生を非受容のイメージで捉えた理由と内容

非受容のイメージで捉えている夫婦は、学生であること自体が不安であり、漠然とした学生の未熟さへのイメージを持っていることがわかった。「どのようにかわるかわからなかった。」「学生だけが分娩にかかわるのかと思った。」「取り出すとは思っていなかった。」という言葉から、受け持ち時の説明では学生が産婦にかかわる内容について十分な理解ができていなかったことが原因であると考えられる。

学生が受け持つことを聞いて受容している夫婦では、個人差があるが歯科医師や看護学生など臨地実習に対して理解し、経験上学生に対する知識がある。「学生だから一生懸命してくれそう」「学生だからいろいろ気を使ってもらえそう」というように具体的に学生についてイメージ持っている。また、「学生だけではないからよいと思った」のように受け持ち時の説明により、学生だけが夫婦にかかわるのではなく助産師が指導について援助するといった学生が夫婦に対する関わり方のイメージを持っている。学生が受け持つことで具体的にイメージできている夫婦は非受容のイメージを持ちにくいことが考えられる。

学生が受け持つことを説明する時点で学生が受け持ち、どのようなかわりをするかという理解を夫婦ともに得ることが必要である。そのためには受け持ち時に夫婦に対し具体的な説明を行うことが大切である。

本研究では学生が受け持つことを夫婦に説明をする際、実習施設や指導者によって説明内容が一部異なっていた。それにより夫婦が学生に対して最初に持つイメージに相違が生じたと考えられる。受け持ち時から夫婦に学生を受容してもらい、3者が円滑な信頼関係を築くことが助産学実習には欠かせない。そこで夫婦に対しだれが行っても一貫した実習内容の説明ができるように表2の基準を作成した。

夫婦に対してこの基準に従い学生の実習内容を十分に説明し、理解を図ることが重要である。

2. 学生に対し教育的支援を考える夫

11組中6組の夫婦の夫が学生に対して勉強してほしいといった教育的視点を持っていた。

分娩進行前の余裕がある時期でも妻は今後の陣痛の程度によって自分は乗り越えることができるだろうかと当事者として分娩に不安を持つ。しかし夫は当事者である妻から一歩距離を置き、分娩を妻に比べ客観視

表2 学生受け持ち時の夫婦に対する助産学実習説明基準

- ・必ず助産師とともに行動し、学生が入ることで分娩介助の方法が異なることはないこと。
- ・複数ではなく一人の学生によるケアであること。
- ・分娩終了まで同じ学生が責任を持ってかわること。
- ・経過の途中でいやな場合は拒否することができ、不利益をこうむることはないこと。
- ・すでに看護師としての学習を終了し看護師免許を取得しており、分娩介助に必要な学習を習得した後実習に来ていること。
- ・学生がかかわった産婦は満足される人が多いこと。
- ・指導の助産師とともに学生も内診・分娩介助を行うこと。
- ・分娩I期からIV期、産後まで一貫して同じ学生が受け持つこと。

でき比較的落ち着きがある。従って夫は学生に対して余裕のもと教育的視点を持つということが考えられる。

教育的視点を持った夫からは、聞き取り調査の中で「役に立てるならば勉強してほしい」「社会で助産師不足が言われているため助産師を育てることに協力したい」「学生という立場で勉強をして一人前になるということは誰でも一緒に皆通る道であるから協力したい」という発言が聞かれた。

男性性という視点において男性は女性に比べ客観的な判断力に長けており、文化を創造し、継承していくといわれている⁶⁾。夫は助産師になるために学習している学生に対し、産婦を受け持ち学習することを客観的に判断し、実習に協力したと考えられる。人は職業人として成長する過程において、指導を受けながら徐々に一人前になるものである。文化を維持・継承し助産師不足といわれている現代社会の中で実習を通し夫は助産師教育に協力したいと考えたのではないだろうか。

3. 夫婦が学生を受容したプロセス

面接を行った11組の夫婦のうち9組の夫婦は受け持ち当初には学生に対して非受容のイメージを持っていたが、最終的には「安心」「信頼」「受け持ってもらって良かった」と学生を肯定的にうけとめていた。

経産婦の例では夫は上の子の世話により自分が妻に

してあげたいと思っていたことが出来なかったが、自分が妻にしてあげたいと思っていたケアを助産師学生がしてくれてよかった、助かったと述べている。また学生がいても夫は妻に対して水を飲ませる、腰をさするといった具体的なケアを行うことが出来たことが満足だと述べている。分娩の進行は様々であり夫婦・家族の形も様々である。学生は産婦の腰をマッサージする方法を夫に指導し、時には夫に代わって産婦の苦痛緩和に努めるなどその時の夫婦のニーズに合わせて、状況を感じ取りながら個別性を用いたケアを実践している⁶⁾。

ドゥーラが絶えず付き添うことは母親を安心させ、リラックスさせ、心地よくさせる。親身になってケアを行い、中断することのないケアを提供することで産婦も夫も満足感に満たされる。ドゥーラは母親のみではなく父親の不安も軽減する⁷⁾といわれている。産婦に対しては先行研究により、学生は産婦に絶えず付き添うことでドゥーラ的効果をもたらし、産婦の不安を軽減することが分かっており本研究においても同様に産婦から「ずっといてくれて安心した」などの肯定的評価を得た。助産師学生の行うケアが母親にとってドゥーラ効果をもたらしたことが考えられる。本研究では夫もまた妻と同様に「ずっと一緒にいてくれたことで安心した」「一緒に歩いてくれて信用した」「優しく接してくれたことで安心した」といったような肯定的な評価をいただいた。父親は子供が産まれるとき妻と二人きりにされてしまうことで恐怖・不安を感じるという⁸⁾。助産師は分娩の進行を診断し、分娩以外にも病棟の他業務をこなしながら分娩管理を行うが、学生はその夫婦のそばに絶えず付き添いケアを行う。夫婦が2人きりになることはなく、夫婦が孤独や不安を感じることは少ないと考えられる。専門的知識を併せ持つ学生が絶えずそばに付き添うことで夫は安堵し、一人きりで責任の重さに耐えるよりもリラックスし、妻への愛情に満ち、気分的にも落ち着いた対応ができることが考えられる。学生は産婦に対し親身になってかかわりを持ち夫婦のそばに絶えず付き添う。このことが産婦のみではなく、夫に対しても安心を与えるということがわかった。また、夫が安心することで産婦により積極的にかかわりを持つことができる。

以上のことより、学生は産婦のみではなく、夫にもドゥーラ効果をもたらすと共に、夫婦と学生の3者の関係はより太い信頼関係が築かれることになる。

「夫婦がリラックスしてドゥーラのケアに信頼を置けば母親は父親からもっと確かな安定した情緒的支援

が得られるようになる」⁶⁾といわれている。立ち会い分娩に学生が関わる際、学生は専門的知識を用いて夫婦に親身になって絶えず寄り添うドゥーラであること、それが学生に必要な夫婦へのかかわりであると考ええる。

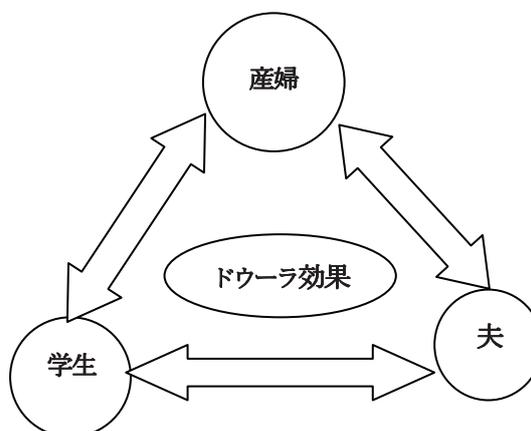


図2. 助産学実習により構築された夫婦と学生の3者関係

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、面接は退院までの期間に実施したもので、退院後時間の経過と共に学生のかかわりが夫婦の認識にどのような影響を及ぼしたのか長期的に追跡することはできなかった。

今後の課題として夫婦と学生の信頼関係がより太く強固なものとなるように実習指導者と協力し、助産学実習内容の理解と協力をはかっていかなければならない。また本研究の症例を増やし、3者の関係により客観的な分析を加えていきたい。

VI. まとめ

1. 夫婦の学生に対する認識は受け持ち時の説明により相違が生じることがわかった。したがって受け持ち時の説明は基準に基づき実施し、理解を求めることが必要である。
2. 夫は学生に対して教育的視点を持っていた。それは男性性による特性によるものが要因のひとつに挙げられることがわかった。
3. そばに付き添い夫婦にかかわる学生は産婦のみではなく、夫に対しても安心感を与えていた。それはドゥーラとしての効果であることがわかった。助産師学生が立ち会い分娩を行う夫婦にかかわる際

ドゥーラでいること、それが必要なケアであることがわかった。

謝 辞

本研究にご協力いただきました11組の御夫婦および実習施設の院長・助産師の皆様に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 中島通子, 牛之濱久代: 立ち会い分娩後の夫の意識に関する研究. 母性衛生. 48(1): 82, 2007
- 2) 出口信子: 夫の分娩立ち会い体験の自己評価とその関連要因. 母性衛生. 40(4): 469, 1999
- 3) 佐藤真由美: 陣痛室夫立ち会い分娩時の夫婦の感情, 第36回母性看護学会集録. 4, 2005
- 4) 渋谷さおり: 助産師学生の分娩介助に対する産婦の認識. 助産雑誌. 59(1): 74, 2005
- 5) 野口純子: 分娩期における助産診断教育の検討ー助産師学生が分娩介助した産婦からの意見の分析ー. 日本助産学会誌. 19(3): 250-251, 2006
- 6) 小林さえ: 男性心理学. 33, 朝倉書店. 1973
- 7) 森脇智秋: 助産学実習における学生が提供する産婦のケアの満足度について. 日本助産学会誌. 18(3): 232-233, 2005
- 8) M.H. Klaus, J.H. Kennell, P.H. Klaus: The Doula Book. 竹内徹, 永島すみえ翻訳: ザ・ドゥーラ・ブック 短く・楽で・自然なお産の鍵を握る女性, 7, メディカ出版. 2006
- 9) Martin Greenberg, 竹内徹翻訳: 父親の誕生. メディカ出版. 1994
- 10) Holloway I. and Wheeler S.: Qualitative Research in Nursing (Second Edition). 2002. 野口美和子監訳: ナースのための質的研究入門. 医学書院. 2006

参考資料①

助産師学生が受け持った立ち会い分娩を行った夫婦に対する質問用紙

夫に対して

1. 立会い分娩をして満足していますか？
(①そう思う②ややそう思う③ややそう思わない④そう思わない⑤その他)
 - ・ どのようなことが満足でしたか？
 - ・ どのようなことが不満足でしたか？それは、学生がいたことが関係していますか？

2. 立会い分娩で妻に付き添ってしてあげたいことは実施できましたか？
(①そう思う②ややそう思う③ややそう思わない④そう思わない⑤その他)
 - ・ 出来たことはどんなことですか？
 - ・ 出来なかったことはどんなことですか？（それは、すでに学生がしていたからですか？）

3. 助産師学生が受け持つということ聞いてどう思いましたか？

4. 学生が行う分娩進行についての説明は分かりやすかったですか？
(①そう思う②ややそう思う③ややそう思わない④そう思わない⑤その他)

5. 助産師学生に対するイメージは当初と現在で変化はありましたか？

褥婦に対して

1. 夫に立ち会ってもらって満足している。
(①そう思う②ややそう思う③ややそう思わない④そう思わない⑤その他)
 - ・ どのようなことが満足でしたか？
 - ・ どのようなことが不満足でしたか？それは、学生がいたことが関係していますか？

2. 立会い分娩中に夫にしてほしいことは実施してもらえましたか？
(①そう思う②ややそう思う③ややそう思わない④そう思わない⑤その他)
 - ・ 出来たことはどんなことですか？
 - ・ 出来なかったことはどんなことですか？（それは、すでに学生がしていたからですか？）

3. 助産師学生が受け持つと聞いてどう思いましたか？

4. 学生が行う分娩進行についての説明は分かりやすかったですか？
(①そう思う②ややそう思う③ややそう思わない④そう思わない⑤その他)

5. 助産師学生に対するイメージは当初と現在で変化はありましたか？

The relations of student nurse midwives with couples in childbirth

Keiko Ueno^{*}, Kazuko Anada^{**}, Keiko Asou^{***}
Ayako Kato^{****}, Rie Koyama^{****}, Chiemi Maeda^{****}

<Abstract>

The aim of this paper is to examine how student nurse midwives can provide full support to couples in childbirth. The subjects of this research are the 11 couples who met a list of standards of conditions for this study. The students have been in charge of them since the first stage of the wives' delivery and also were also present during delivery. Interviews with the subjects were given individually on the second day of the childbirth or later when the tensions caused by delivery were supposed to have eased, and the dialogue was recorded word for word for later analysis.

It was found that the couples recognized the presence of students as negative, educational, or positive. Looking at how couple's attitudes towards the students changed from the first meeting to after delivery, the results of the interview were categorized into six groups: (1) both of the couple recognized the students as positive; (2) husband as positive but wife as negative; (3) wife as negative; (4) husband as educational and wife negative; (5) husband as educational and both as negative; (6) both as negative. The analysis shows: 1) the couple's recognition of students differs according to how well the couples are informed by the students at the beginning. Therefore, it is significant for students to adequately explain their status as a student of practical training along with its details of their training; 2) the husbands recognize the presence of students as merely being for training; 3) the presence of students attending couples in delivery provides comfort to not only the wife but also the husband. It was found to exhibit the Doula Effect.

Keywords : couples in childbirth, examine how student nurse midwives, care of student nurse midwives, Doula Effect

* Instructor in the Division of Midwifery, Seinan Jo Gakuin University
** Assistant in the Division of Midwifery, Seinan Jo Gakuin University
*** Professor in the Division of Midwifery, Seinan Jo Gakuin University
**** Graduate of the Division of Midwifery, Seinan Jo Gakuin University